



消えた街角:富岡畦草・記録の目シリーズ

昭和37年「四ツ谷見附橋」



新宿通りに位置している四ツ谷見附橋。見附とは、城壁の出入り口に造られる砦の意味で、江戸城の甲州街道側に造られた城門を四ツ谷見附と呼んでいた。その城壁は明治時代に撤去。大正時代に陸橋、四ツ谷見附橋が架けられたといふ。

現在、四ツ谷駅周辺は二つの顔を持つ。一つは、迎賓館を中心とした木々が生い茂る落ち着いた雰囲気のある街。もう一つは、新宿通りを中心にビルが建ち並ぶ都市としての顔である。こうした自然と都市の共存こそが、今後の都市設計を考えるうえで重要なかもしれない。(2000年10月27日 撮影)

江戸城外堀の区間の水を抜いて明治二十七年(1894年)中央線の前進・甲武鉄道が開通し、四ツ谷駅は開業した。これが、官営の中央線となり、東京駅まで延長されたのは、大正八年(1919)のことである。それから四十年後の昭和三十四年三月、菅団地下鉄丸の内線が斜めに交差接続して、赤坂、霞が関方面の便は飛躍的に向上した。ところで、この掘り割の四ツ谷駅を跨ぐ四ツ谷見附橋は、大正二年(1913)に架けられた。近くの赤坂離宮(現、迎賓館)との調和を考慮した美しい橋で、スチムン橋の橋灯がともる夕暮れ、ことさらに優雅であった。

しかし、交通量の増大と老朽化に伴い、平成三年に大改修された。ちなみに、この橋を渡っていた11系統新宿・月島間の都電は、昭和四十三年に廃止されている。

(昭和三十七年 月十三日 撮影)